

そのむかし、7つ揃えると、  
願いが叶う不思議な玉の話があった

龍の玉アドベンチャー

橋本コウ

僕が小学生だったころに流行ったマンガで「7つの玉を集めると願いが叶う」というものがあった。でもマンガとしては、願いを叶えて何かをするのが目的ではなくて、俗にいう格闘マンガだ。ただし、空手とかボクシングやストリートファイトとかではなく、登場人物が気をためてビームのような技を出せて、地球のみならず宇宙をまたにかけた壮大な冒険マンガ。おそらく、僕たちの子供時代ではナンバー1の人気を誇っていたと思う。

このマンガのファンは誰でも思ったはずだ。

「願いが叶うなら、俺は何にしようかな？」って。

地球上にある玉は1つしか願いを叶えられない。しかし宇宙にはもう1つ別の惑星があって、その玉は3つの願いを叶えられる。そのためには、その惑星の特殊な言葉を唱えなければならないのだけれど、それはいまはどうでもいいことだ（忘れずに覚えているが）。

\*

僕は夜中に目覚めて、誰も起きてないことを確認した。僕がこれからやろうとしている楽しみを、家族といえども、誰にも邪魔されたくはない。念には念を入れて、僕は忍び足で玄関に向かった。突然、ととこと、と物音がした。本来なら冷や汗をかくところだが、僕にはこの音が何なのかわかっているから、心は乱れなかった。ふりかえると、うちで飼っているチワワがそこにいた。

彼（虚勢しているけどオスだ）は、おそらく僕が散歩に行くと思ったらしい。散歩に行きたいときのポーズをとって、舌を出して僕を見つめている。こいつはいま何時だと思っているんだろう。僕は玄関の方を向き直し、一歩だけ足を運ぶと、とこ……。彼も一歩だけ前に進む音がした。やれやれ。僕はもう一度振り向いて、オスワリをしている彼を抱き上げた。犬に人格や感情があるかはわからないけど、どうやら犬は人間よりも、いかにすれば人間をコントロールできるかを心得ている。僕は彼も連れていくことにした。

外に出ると、10月の夜にふさわしく、やや肌寒い。空気が澄んでいて、夜空にはいくつかの星が見えた。むかし買ってもらった図鑑をひっぱり出して、例の惑星はリサーチ済だ。右から4番目の星が、僕の目的とする惑星だ。その星だけは、他の星に比べて緑色に強く輝いている。実際に緑色なのか、それとも僕が意識的に緑色に見ているのか、それはわからないが、緑の深さが、これからの僕の前途を安らかにしてくれている気がする。

僕は家の向かいにある公園に向かい、草むらに隠していた宇宙船を引きずり出した。正確に言えば、宇宙船は大きいので引きずり出したのではなく、付属のリモコンで公園内まで動かした。僕と犬のふたりが乗るには十分な広さとスペックのある宇宙船だ。今夜に照準を合わせてワープ

の計算はすでに済んでいる。その日その日の星のめぐりに合わせて計算しないと、ほぼ何かしらの星に激突して宇宙の塵と化してしまうのだ。宇宙船に乗って、リモコンのワープボタンを押して一晩眠れば、目的の惑星に着くはずだ。簡単なことだ。説明書にそう書いてある。

いちおう、僕がなぜ宇宙船を所持しているかについて書いておく。いまは2011年だから、一般人が宇宙船を気軽に持てる時代ではない。でも僕は、先月までかけて世界中をまわり、7つの玉を集めたから「宇宙船をください」と願いを叶えてもらったのだ。だから持っている。

僕と犬は宇宙船に乗り込んだ。夜風にさらされて、宇宙船の中は冷たくなっていた。犬用の座席はさすがになかったので、僕の胸の中に彼を入れてあげることにした。僕の胸の中に入れると、シャツの襟から顔を出して前を向くのが彼の大好きなスタイルだ。彼の体温が温かくて気持ちがいい。そろそろ行こう。僕はリモコンのボタンを押した。

ワープははじめての経験なので、身体に受ける圧力は相当のものだと覚悟をしていたが、実際には何のことはなくスムーズにことは進んだ。車で40キロまで加速するくらいの感覚で少し拍子抜けしたが、ダメージをくらすことはなかったから安心した。犬にも何の影響も出ていない。窓の外は、すでに真の闇になっていたが、1分間に1回くらい、星らしき明るいものが線状になって目の前をよぎっていく。その光景と、音のない世界で、僕たちはいっしょに眠りについた。

\*

胸元がもごもごと動いている。胸にぬめっとした感覚を覚え、僕は目をあけた。彼が僕のシャツの中から出ようともがいていた。窓の外を見ると、緑につつまれた世界が広がっていた。緑といっても森や林ではない。大地一面が緑色をした土でおおわれていた。地球から見た惑星が緑色だったことに間違いはなかったのだ。僕たちは船から降りて、いちおう空気があることを確認してから地上に降り立った。僕はいま、地球から遠い宇宙の惑星にいるのだ。

ここで時間を早送りする。この惑星でどんな苦勞をして、どんな危険な目にあっただかは、どうでもいいと僕は思う。とにかく、僕たちはこの惑星にある7つの玉を全部集めた。最後の1個は僕が愛してやまない彼が探し当てた。地球上では気づいてやれなかったが、やはり犬には人間よりもすごい嗅覚がそなわっているらしい。砂漠地帯の岩場でわんわんと吠えていた彼のところに行ってみると、神々しいまでに輝いた最後の玉があったのだ。犬がものを見つけてわんわんと吠えている図は、それこそマンガの中だけの話だと思っていた僕は、自分の先入観と偏見に反省し、犬に「ありがとう」とささやいた。

僕は小さいときに覚えて忘れられずにいた、この惑星特有の言葉を叫んだ。すると、玉の元から龍が現れた。地球で見た龍よりも数倍は大きく、僕は怖くて震えてしまったが、犬はもっと驚いたらしく、立ったまま眠っているように見えた。たとえ大きくて怖くても、僕たちが殺されて

しまうわけではない。内心の恐怖に感づかれないように、僕はさらりと願い事を叫んだ。しつこいようだが、願いごとは3つ叶えてもらえる。

「1つ目、僕をモテ男にしてください」

「2つ目、僕をお金持ちにしてください。具体的には1兆円ください」

「3つ目・・・」

僕は考え込んでしまった。

「3つ目を言え。最後の願いを叶えてやろう」地球の龍も言葉を口にしたが、この惑星の龍も話せるらしい。日本語が通じて良かったが、ここが宇宙だという実感は得られない。

モテ男、お金持ち。これが叶ったらすごいことだけれど、同じシチュエーションになったら、誰でも思いつきそうな願いだと思う。そういう意味では凡庸な願いだ。せめて3つ目は少し違った視点から願いを叶えてもらわねば。僕は犬を見おろした。彼はまだ立ったまま眠っているようだ。彼の気持ちを想像してみる。突然どこかわからない惑星に連れてこられて、僕のために7つ目の玉まで探し当てた。そんな功績を出したと思えば、自分より何万倍も大きい龍が現れた。彼の目には、この光景がどう映ったのだろう。僕はかがみこんで、彼の頭をなでてあげた。彼はビクッと震えたが、それが僕の手だったと知り安心したのだろう、僕の手を小さな舌でなめてきた。

「お前は本当にかわいいやつだ。みんなの人気者、永遠の赤ちゃんだよな」

そんな言葉を彼にかけたときに、雷が落ちたごとく、ひらめいた。

「3つ目、パールを散歩したとき、女の子から、100%声をかけてもらえるようにしてください」

「たやすい御用だ。これで3つの願いを叶えてやった。さらばだ」

龍がまばゆい光に包まれ、次の瞬間、7つのボールが空の彼方へ飛んでいった。龍の姿はもうなくなって、あたりは静寂に包まれた。

「最後の願い、けっこうおもしろいと思ったのに、あの龍、ぜんぜん笑わなかったな。パール、お前帰ったら人気者だぞ」

パールというのは文脈から理解してもらえと思うが、僕の飼い犬の名前だ。この惑星についてきた犬のこと。彼とか、犬とか、チワワとか、いろんな名前呼んでしまったが、すべてパールのことだ。3つ目の願いで、パールが重要な役割を担うことになった。地球に帰るのが楽しみだ。僕とパールは、20分程散歩をした後、この不思議な緑色の惑星に別れを告げ、宇宙船に乗り込んだ。窓の外を見たが宇宙船の中が明るいせいか外の景色は見え、窓に鏡のように反射して映った僕は、かっこよくなっていた。

僕たちは来たときと同じように座席に座り、僕はリモコンのワープボタンを押し、そのままふたりに眠りについた。

## はじまりの1章

---

僕は頬に温もりを感じて目を覚ました。枕元でパールが僕の頬を舐めていたのだ。僕は心地よい疲れを感じたが、横になったままパールを天井に向けて抱え上げた。パールはこのポーズが大好きだ。布団に足をつけようと伸ばす仕草がなんともかわいい。

ちなみにこれは、夢オチの話ではない。緑色の不思議な惑星からちゃんと地球に戻り、ちょうど夜だったので、帰宅してそのまま眠ったのが6時間くらい前のことだ。

「パール、今日から俺たちモテモテだな」

もともとモテるパールには関係ないかもしれないが、とにかく僕にとっては相棒パールとともにこれからやってくるバラ色（になるはず）の人生が楽しみだ。

僕はベッドから起きて、パールを抱いてリビングに向かった。宇宙旅行で疲れていたが、僕の足取りは軽やかだった。

\*

僕は散歩中にリードはつけない。パールはそんなに速くは走れないし、自分勝手に遠くまでは行かないからだ。マイペースなフリしてあちらこちらと駆け回ってるように見えて、ちゃんと僕との距離を保っている、臆病でかわいいヤツだ。

そういえばパールの去勢のときにこんなこともあった。犬には麻酔が効きやすらしく、注射をした1秒後にはパタリと寝てしまった。そのときの様子もかわいかったが、本当にかわいかったのは手術後のことだ。

手術後1時間くらいしてパールがピクリピクリと動き出した。僕は「パール、大丈夫か？」と声をかけ、パールが覚醒するのを待った。パールは半目を開けて僕の方を見たが、またそのまま目を閉じてしまった。そのまま15分くらい待っていたが、起きる様子はない。僕はある作戦に出た。

「パール、じゃあ、俺行ってるからな」

僕は動物病院の待合室に向かって歩き出した。トコトコトコ。僕は後ろを振り向いた。さっきまで「まだまだ起きれませんから、ちゃんと見ててね」と言いたそうな態度をとっていたパールがこっちに向かって歩いてくるころだった。特にフラフラしているわけでもなく、いつもの散歩のように歩いてくる。要するに、マイペースになり切れず、つねに僕との距離を保っていなければならない寂しがり屋なのだ。

パールは僕の少し前を歩き、公園に生えている草を舐めていた。犬は胸やけをすると、草を食べるらしい。きっと緑色の惑星で食べた人間用の缶詰が重かったのだろう。僕はパールが草を食べて、次の草、次の草と食べ歩くのを見るのが好きだ。まるでドラクエで宝箱が連続で置いてあるのを追いかけるときに似ている。そして「最後はミミック」という罠にかかってしまうのだ。

しかしリアル世界ではラストが違っていた。パールが宝箱を開けると、白いポメラニアンが現れたのだ。犬同士の会話なので、なんて言ってるのかわからなかったが、二匹の様子を見ると、じゃれあっているようだ。パールにとってこういうシーンは多い。パールがかっこいいのか、犬はストライクゾーンが広いのか、会ってすぐにイチャイチャし始める。人間に比べてうらやましい種族だと思う。そのときだった。

「ごめんなさい、離れたすきにそちらのワンちゃんのところに行っちゃって。こら、ラム。そちらのチワワちゃんが嫌がってるでしょ？」

横から女性の声が聞こえてきた。僕がそちらを見ると、髪の長い、いかにも犬が好きそうな女の子が小走りでこちらにきた。女の子は黒地に白の水玉のワンピースを着ていて、とてもかわいい子だった。僕は最近、このデザインのワンピースが好きだ。緑色の惑星で願いを叶えてもらった中には「幸運になること」はなかったが、どうやらモテる人というのは、それだけで運も味方にするのだと思った。

「大丈夫ですよ。あいつもそちらのワンちゃんと戯れられて楽しんでますよ。気にしないでくださいね」

僕は言葉を嚙まないように、注意深く、かつ冷静を装って言った。

モテるようになった（かどうかは、まだわからないが）とはいえ、自分の心理は変わっていないので、かっこつけるのにも細心の注意を要する。大きなパラダイムシフトを自分の中で起こさなければいけないと思った。

「それならよかった。じゃあ、しばらくあのままにさせておいていいですか？」

「もちろん。僕たちもあのベンチに座って待つてようか」

僕は二匹が戯れているところの近くにあったベンチを指差して言った。僕たちはベンチに並んで座った。

女の子は咲という名前だった。彼女は膝を閉じ両手を両膝にのせて、二匹の戯れを眺めていた。彼女のその姿勢や、太陽光で細めた目や、風でたまに揺れる長い髪の毛がなんともかわいくて、僕は犬たちよりも彼女の方ばかり見ていた。僕の視線に彼女も気づいたようだ。

「なんか、わたしについてますか？」

「ううん。すごくかわいいと思ってね、咲ちゃんを見てたの」

彼女は一瞬うつむいた後、顔を上げ僕を見て、犬たちのもとに駆け寄って行った。突然のかわいい発言でさすがに警戒されたと思っただけなのだが、どうやらそうではないようだ。彼女は犬たちにまじって楽しんでいる。わりと人見知りをするパールも彼女になついていた。あいかわらずの面食い犬だな、と思いながら、僕もそちらに向かった。

## 結ばれた2章

---

犬といっしょに泊まれるペンション。なんてすばらしいコンセプトなんだろう。そして、犬といっしょに入れる露天風呂もあって、犬好き、女好きには最高のスポットだ。

僕たちふたりと2匹は、そんな露天風呂でくつろいでいる。すこし訂正したいことがある。2匹と書いたが、犬好きにとって、その表現は不適切だ。人間だろうが、犬だろうが、人という単位で数えるのが正しい。積極的に説得するつもりはないけれど、一部の人にはきっとわかってもらえることだと僕は思う。だから、今後はそういう数え方にする。

僕たち4人は、露天風呂でくつろいでいる。僕と咲は、それぞれの飼犬を抱いてお湯につかっている。足がつかずに足をバタつかせている犬たち、そしてお互いを見て、かわいいねと、つぶやいた。

\*

露天風呂をあがった僕たちは、じゃれ合う犬たちを見ていた。彼女の犬から僕の犬に近寄ってきただけあって、彼女の犬は積極的だ。そんな雌犬を見て、彼女は頬を赤くした。

「ラムったら。パールが引いちゃってるでしょ」

「そんなことはないと思うよ。パールは奥手だけど、ラムのことが大好きだよ。あいつのことずっと見てるから、それくらいはわかるよ」僕は彼女の恥ずかしさを拭ってやりたいし、事実を言ったまでだ。パールは受け身でもモテるタイプだから、自分から頑張ることは少ない。

「僕たちもじゃれ合ってみる？」

「うん」

犬たちといっしょにいと、ズルい技が使えてしまう。何となく犬の真似をしてるふりをしながら、自分たちもいちゃいちゃしやすい雰囲気にもっていけるのだ。犬たちがお互いに匂いを嗅ぎ合えば、僕も彼女の匂いを嗅げる。犬たちが口を舐め合えば（これはたぶんキスではないだろうけど）、僕も彼女にキスができる。犬たちは、なかなかその先にいくことはないが、そのときには僕たちはもう、その先の雰囲気になっている。本当にズルいやり方だと思う。

僕はパールとラムをベッドから降ろした。ラムはあいかわらずパールにちょっかいを出しているが、パールはつぶらな瞳で僕を見つめていた。こいつは俺のことを理解している、と思うと同時に少し恥ずかしくなってしまった僕に、彼女が触れてくる。

「仁も、パールに負けないくらい、受け身だよ」

「まあ、シャイですよ、僕は」

僕は彼女に見つめられるのを逃れるように、彼女を引き寄せて髪に触れた。いつもと違うシャンプーの匂いがした。彼女の肌も、いつもと違う味がした。やがて、うっすらと汗をかきはじめて彼女は、いつもと同じ味になった。



\*

僕たちが眠りについたとき、犬たちはもう寝静まっていた。木製の床にふたりで寄り添って眠っていた。パールもすごくかわいいけど、ラムも本当にかわいい。でも咲はもっとかわいい。こんなかわいい彼女ができた。僕はドラゴンボールに感謝した。

\*

今回の旅行は1泊だったので、翌日僕たちはチェックアウトした。ペットも泊まれて、部屋に露天風呂もあり、昨夜の夕食もスペイン料理で美味しかったのに、料金は4人で30000円ちょいだった。僕が全額支払って、みんなでペンションをあとにした。

彼女ができたのにつつを抜かして忘れていたことがあった。お金持ちになる願いも叶えてもらっていたから、僕の口座には約束通り1兆円が振り込まれていたことだ。ナメック星からどうやって振り込んだかは謎だったが、とにかく一生かかっても使い切れないだけのお金が、僕の手元に舞い込んでいた。このことは、咲にはまだ言っていないし、今後とも言うことはないだろう。ふつうに考えて、1兆円の資産がある男とか、どう思われるのだろうか？ とにかく話す必要性は感じていなかった。でも彼女と犬たちには、いくらでもお金を使ってあげよう決めていた。

## 裏切りの3章

---

僕と咲は、犬たちとともに、いくつかの季節をすごした。僕と咲、パールとラムは、それぞれがそれぞれの恋をし、ともに楽しみ、ともに笑い合った。しかし、その時間が1年を超えることはなかった。

原因は僕の浮気だった。僕が別の女の子に手を出したからだ。ドラゴンボールで叶えてもらった最後の願い「パールを散歩したとき、女の子から、100%声をかけてもらえるようにしてください」という願望は、たとえ僕が咲と幸せな日々を送っていても、容赦なく叶えられてしまった。

\*

あの日の早朝、僕はパールを連れていつもどおり散歩をしていた。咲は何日か微熱が続き、僕の家で眠っていた。ラムも彼女といっしょに留守番をしていた。パールといつもの道を歩いて、間もなく彼がおしっこをする木に差しかがろうとしたとき、木の後ろからミニチュアダックスフンドがパールに駆け寄ってきた。そしてその後を追うように、女の子が走ってきた。まるで1年くらい前に咲と出会った状況に酷似していた。女の子は僕に話しかけてきた。

「そちらのワンちゃん、かわいいですね。うちのクララって、かわいいワンちゃんが大好きで。面食いで困っちゃう」咲とは違う会話から始まった。

「パール、お前、かっこいいってさ」

僕はパールに話しかけた。パールは、じゃれあってくるクララをかわしながら、ツンとしていた。あまりクララのことを好きではないようだ。

「クララ、あまり好かれてないようですね。そちらのチワワちゃん、小さいし、クララが怖いんですかね？」

「そんなことはないと思うんだけどね。むしろクララちゃんの方がモテるでしょ？」

「ドッグランとかに行くと、結構たくさんワンちゃんが寄ってくるかな。白いミニチュアダックスだから、珍しいのかもね。わたしもクララみたいにモテたいんだけどね」女の子はそう言って舌をちょこんと出した。

女の子は麻衣といった。会話からわかるように、積極的な女の子だ。髪の毛は咲と同じくらいの長さだったが、色は茶色で、だいぶ強めのパーマをかけているようだ。早朝だから化粧は薄かったが、帽子とサングラスの感じが、夜の女を匂わした。別の可能性として芸能人も考えたが、僕の知る限り彼女に似た芸能人はいなかった。だからたぶん、夜の女だ。

僕は麻衣から携帯番号を聞いて、その日は別れた。パールは首をかしげて僕を見ていた。彼の切なそうな目は、僕に一抹の胸の痛みを与えたが、家まで戻る間にその痛みはどこかに吹き飛んでしまった。

\*

麻衣と次に会ったのは、初めて会った日の週末だった。今日の午後、ランチの後で眠くなっていたときに「晩ご飯でもいっしょに食べない？」というメールをもらい、僕は即OKの返事を出した。場所は池袋のサンシャイン通り。僕はこの時点では、まだ咲のことが好きだったし、浮気をしている意識はなかった。でも、「じゃあ、何が目的でご飯に行くの？」と問われれば、何も答えることはできないだろう。彼女にしたいとは思っていなかったけれど、少なくとも遊びの関係になれるかも、と期待はしていた。

彼女は僕の予想通り、夜の女だった。夜の女といっても、風俗嬢ではなくキャバ嬢で、麻衣は茶色の髪を派手に盛っていた。あいかかわらずサングラスはしていたが、初めて会ったときの彼女とは別人のようだった。

「この前いえなかったけど、わたし夜の仕事をしてるの。でも寂しいから、犬を飼って寂しさを紛らわしてるんだよね。こんなわたしのこと、どう思う？」

こんな会話を誰が予想しただろう。彼女は会って突然直球を投げてきた。これがモテる男に群がる女の姿なのか。僕は内心を見透かされないように答えた。

「まー、キャバクラくらいは、なんてことないかな、俺は。麻衣ちゃん、この前は子供っぽい感じがしたけど、こうやって見ると大人の女って感じがするね」

「ひどーい、化粧が上手ってこと？」

「そういう意味じゃないよ。子供っぽい面もあるし、大人っぽい面もあって、魅力的だってこと」

彼女はちょっとだけ唇を尖らせたが、すぐにニコッと微笑むと、目の前にあるグリーンサラダを頬張った。シャキシャキという効果音とともに、僕を見つめる彼女の目は、やや焦点が合っていないように見えた。でもその目は、僕にはとても澄んでいるように見えた。僕は彼女から目を逸らして、自分のイカスミ・スパゲティを食べたが、彼女の視線から逃れながらだったから、口のまわりにイカスミが付いてしまったかもしれない。

「ユー、お口が黒くなってるよ。かわいいね。ねえ、わたし今日は12時にはお店上がる予定なの。できたらちょっと待っててくれたら嬉しいんだけどな」彼女はフォークでトマトを刺しながら、相変わずの遠い目をして、独り言のようにつぶやいた。

「じゃあ俺、スロットでもして待ってるよ」池袋はパチンコ激戦区だから、いまからでも良い台があるにちがいない。そんなどうでもいいことを考えながら僕は彼女に約束をした。

僕の浮気は成立した。今夜は咲とラムは彼女のアパートにいる。パールは僕のアパートでひとりお留守番だ。彼女がお店に向かった後、僕は池袋の明るい夜空を見上げた。星は見えなかったが、僕の網膜は、夜空にパールの星座を形成した。

「パールごめんな。今夜はひとりでおやすみ」

## 別れの4章

---

麻衣はベッドでも積極的で、僕たちが眠りについたのは、カーテンから朝日が透けて、うっすらと明るくなったころだった。僕の左腕を枕にして、麻衣は静かに寝息をたてていた。眠る前に化粧を落としたらしく、公園で初めて会ったときの、幼さが残る彼女の顔になっていた。年齢は聞いていないが、たぶんまだ20代前半なのだろう。

僕は、麻衣が起きないように静かに左腕を抜き、体を回転させてベッドの端に座った。そしてテーブルの上の携帯を見た。メールありのランプがチカチカ光っている。僕は現実に戻された。メールは2通届いていた。もちろん、咲からのメールだった。

1通目。

「仁くんへ。夜遅くにゴメンね。やっと熱がさがってきたよ。この1週間、いろいろご迷惑をかけました。御礼に、明日ごはん作りにいきたいな。もちろんラムもいっしょに。午後、みんなで散歩に行って、帰りに食材買ってさ。返事待ってるね」

2通目。

「もう寝ちゃってるんだね。わたし今週はだいぶ寝ちゃったから、こんな時間に目が冷めちゃって、困っちゃうね。明日連絡まってるね。おやすみ」

咲のメールは、僕を罪悪感まみれにするには十分すぎる言葉を持っていた。同じ空の下で眠っている僕を思いながら、咲はこのメールを書いたのだ。きっと咲の隣にはラムがいて、僕の隣にはパールがいると信じて。それなのに、僕の隣には麻衣がいた。咲には知る由もないだろう。

僕は初めての浮気にどう対処すればよいか、わからなかった。まだ咲にも麻衣にもバレていないけれど、この心押し付ける圧迫感は耐えがたい。

麻衣には隠してるつもりはなかった。隠すというよりは、言う必要がないと思っていた。そもそも僕自身、遊べる相手になれたらいいなっていう軽い気持ちだったからだ。だけど咲は違う。咲は僕の彼女だ。結婚してるわけではなくても、ふつうは僕と彼女の関係はそれなりに強固で、他人が簡単には入ってこれない絆がある。だから、麻衣を僕の側に入れたことは、咲に対する不道徳、裏切りに値する。

僕は携帯でメールを書き始めた。

「ごめん、寝てた。じつは、咲に話したいことがある。13時に公園のいつものところでいいかな？」

僕はメールを何度も読み返した。いや、読み返していたわけじゃない。携帯に目の焦点を当ててはいたが、ずっと頭の中で考えていた。このメールを送るべきかどうかを。

僕は削除ボタンを押した。そして新しいメールを書いた。

「おはよう。ごめん、寝てた。熱下がって良かった。最近あまり会ってなかったから、明日は咲の

自慢のごちそうが楽しみ！いつもの公園に13時でいいかな？」

僕はメールの送信ボタンを押した。送信完了を伝える、ヒューンという音がした。

もぞもぞとシーツが動いて、麻衣が僕の手を握ってきた。彼女の手のひらはひんやりしていて、僕は思わずビクっとしてしまった。彼女は自分の指と僕の指とを絡めてきた。

「仁、おはよう。早起きだね。わたし、まだ眠いよお」

麻衣はそういうと再び目を閉じた。僕の手を握ったまま、指を動かす仕草がかわいい。僕は彼女のおでこにキスをした。彼女は目を閉じたまま、ふふ、と微笑して「また会ってね」と囁いた。

僕はなんとなくだが、麻衣は僕と咲の関係を知っているんだと直感的にわかった。いつも同じ公園で散歩しているのだから、それを麻衣が見ていても何ら不思議はない。僕は麻衣の「また会ってね」という言葉の裏に、彼女の淋しさを垣間見た気がした。麻衣は僕を略奪したいわけではないのだ。ただ、たまには自分のことも見てね、と言っているように思う。僕は自分自身の思い上がりに嫌気を感じつつも、そんな麻衣の気持ちが痛いほど伝わってきて、咲に対しての罪悪感と同じくらいの大きさで、麻衣に対して罪悪感を覚えた。

僕はこの修羅場をどう切り抜ければいいのか。僕には1兆円近くのお金があるので「金で解決」という方法もあるのだが、そんなことは絶対にできない。お金って、肝心なことは何も解決してくれないのだと思った。

咲にひたすら謝ることも考えた。謝って謝って反省し、何回も咲に叩かれて、咲の気が済むまで殴らせよう。それで許してもらえらば、僕はこの罪を告白しよう。

でも、麻衣はどうなるのだろうか。僕が咲に許しを乞うことは、もう二度と麻衣には会わないと誓うこととイコールだ。麻衣の淋しさを知ってしまった僕は、そんな薄情なことはできない。咲よりも、麻衣の心の方が不安定であるのは、麻衣の言動や行動を見ればわかる。麻衣をほっとけるはずがない。

咲と麻衣、ふたりの女の子の気持ちを考えて感傷的になってる僕は、なんて下種な男なのだろう。結局は誰のことも考えていない。自分の罪からいかに逃げるかだけを考えている。ドラゴンボールでモテるようになったとはいえ、一般論として、モテる人が下種なはずはない。これは僕だけの問題なのだ。

僕は決心しなければならなかった。

「麻衣ちゃん。話していなかったんだけど、俺、彼女がいる。だから、今日これから別れ話をしてくるよ」

麻衣は目を閉じたまま、僕を握る指の力を強めた。僕は指を握り返した。

「また、連絡するよ」

僕は脱ぎっぱなしにしたはずの服を着ようと思ったが、それはソファの上にきれいにたたまれていた。僕は麻衣を愛おしく思いながら、ジーンズを履き、Tシャツを着て、ボタンダウンのシャツを羽織った。そしてホテルの部屋を後にした。

こうして、そろそろ桜のつぼみも膨らみそうな3月の空の下、僕と咲は別れた。

地面に屈み込んで泣きじゃくる咲と、咲のジーンズを舐めるラム。ラムに駆け寄ろうとするパールを抑える僕。このときのパールは、いまだ出したことのないような力を出していた。

この別れで悲しいのは、咲だけじゃないのだ。パールとラムも、無理矢理引き離されて、明日からはもう会えなくなるかもしれない。言葉も通じないので「なぜいつもいっしょにいたのに、突然いなくなってしまったのか」わけもわからず、別れを迎えるのだ。僕はパールをやさしく撫でて、胸に抱いた。

「咲、ホントにごめん。この1年近く、咲といっしょにいて、楽しかった。ラム、パールがお世話になったな。パールも幸せだったって」

咲は泣いたままだ。何も言わない彼女をしばらく見ていたが、やがて僕は、彼女に背中を向けて歩き出した。パールは相変わらず咲とラムの方を見ていた。パールの遠い目の中でキラキラ輝いているのは涙なのだろうか。

「パール、帰ったらチーズあげるからな」

いつもはチーズという単語に反応するパールだが、このときは何の反応もしてくれなかった。

## 同棲の5章

---

突然家に舞い込んだクララに、パールは露骨に嫌悪感を露わにした。クララは麻衣の飼い犬で、白のミニチュアダックスフンドだ。パールはよほどラムのことを好きだったのだろう。犬だから、少なくとも人間にわかる言葉を話せないのは、僕にとっても麻衣にとっても救いだった。

麻衣は生活のほとんどを僕のアパートで過ごした。同棲。僕と麻衣、パールとクララの4人暮らしが始まった。

麻衣は料理がうまかった。僕はキャバ嬢には、料理とか、いわゆる家庭的な素質を求めていなかったが、それは偏見だったと、すぐに自分の考えを恥じた。麻衣もなんてことはない、ひとりの女の子だった。きっと、当たり前のように幸せな生活を求めているし、ふつうの女の子と同じように「かわいいね」って頭を撫でてもらえれば嬉しいのだろう。職業は麻衣の何ひとつ表してはいないのだ。

クララになつこうとしないパールだが、麻衣は積極的にパールに接した。パールの人見知りは激しく、チワワとは思えない吠え声を出して麻衣を威嚇する。

「あまり構わない方がいいよ。こいつ、だいぶおとなしくなったけど、昔は人のこと噛みまくってたから」僕は吠えるパールをタイミングを見計らって掴まえようとしている麻衣に忠告した。

「大丈夫、気をつける。はやくパールと仲良くなれないと、わたしもクララもつらいから」彼女は真剣な眼差しで応じた。

そのとき、パールが麻衣の指先に噛みついた。「きゃ」彼女は小さな悲鳴をあげた。パールは口を彼女から離したが、なお唸り声をあげていた。ウウウという声にクララは驚いているのか、ベッドの脚に体をつけて固まっていた。

「ほら、いわんこっちゃない。もう今日は諦めた方がいいって。2ヶ所噛まれると、明日腫れるよ」

「いや、やらせて」

彼女はそう言うと、タイミングも関係なくパールを掴みにいった。そして見事パールを掴まえ、そのまま抱き上げた。はじめて抱き上げたパールの重さが予想以上だったのか、彼女は少しだけ態勢を崩したが、すぐにもとの姿勢に戻った。

「大丈夫。怯えていただけなんだよね」

麻衣はパールの頭を撫でながらつぶやいた。一方のパールは捕まった途端、いつもと同じようなベロを出して笑っているような表情になった。

麻衣がパールを抱き上げて以来、パールはだいぶ彼女になつくようになった。ご飯とか散歩とか、麻衣のことをきいている。ただ、クララに対しては、なかなか心を開こうとはしなかった。クララに対して唸ったりすることはないが、クララがパールに甘えようとしても、見向きもしないで別の方向を見てしまう。このパールの行動に、僕と麻衣は気まずい思いをした。

「パールは、クララのことを嫌いなんだね。人と同じように好き嫌いはあるからしょうがないけど、毎日いっしょにいるクララがかわいそう」彼女は僕に言ったのか、パールに言ったのか、

小さな声でつぶやいた。

「パールはきっと、去勢しちゃってるから、恋愛とかには興味ないんじゃないかな？」

僕はパールとラムのことは隠しておいた。パールはポメラニアンのラムのことがたしかに好きだったし、恋愛に興味がないわけでもない。でも、麻衣にそのことを伝えることは、僕にはできなかった。

でも、僕が隠すのとは裏腹に、麻衣はパールの恋愛について知ることになった。

ある日、パールの散歩から帰ってきた麻衣は、淋しそうに微笑んでから、彼をフローリングに降ろした。そして語り出した。

公園を散歩していると、突然パールが駆け出したの。わたしが「待て」と言っても、全然聞こえてないようだった。パールは、いつもとは比べられないくらい速かった。やっと追いついたわたしが見たのは、パールがポメラニアンとじゃれあってる姿と、ポメラニアンから少し離れて立っている黒髪のキレイな女の人だった。わたしは瞬時にこの女の人とポメラニアンが誰だかわかったわ。

わたしは呆然とその場に立ち尽くしていた。どのくらいの時間がたったのかもわからなかった。たぶん、ほんのちょっとしかたっていないと思うけど、わたしは金縛りにあったように動けなかった。やがてわたしが我にかえったとき、黒髪の女の方はポメラニアンを抱きあげて、パールに何がささやいていた。なんと言ったのか、わたしには聞こえなかった。

「パール、お家に帰ろう」

わたしは言ったけど、パールはしばらくポメラニアンの後ろ姿を見送っていた。ポメラニアンも何度かパールの方を振り返っていたけど、やがて公園の向こうに消えて見えなくなった。パールがやっとわたしの方に来たから、わたしは彼を抱き上げたわ。そのときのパールは、本当に悲しそうな目をしていて。パールはクララが嫌いなんじゃない。あのポメラニアンと、切ない恋をしているんだって思った。そして、わたしがパールに淋しい思いをさせてる張本人なのよ。

麻衣は話している途中から泣きはじめていて、最後は何を言ってるか聞き取りにくかった。僕は麻衣をひとりで散歩に行かせた迂闊さを悔いた。咲も麻衣も、パールの散歩からはじまった恋だ。ふたりが会う可能性が高いことなど、簡単にわかったことだ。僕は再度、自分の罪深さを知った。たくさんの人を不幸にしているのは、僕なんだ。